

第4期第13、14回詳報

防災想像力が大事

避難所組織クモの巣形に



東日本大震災の伝承と防災啓発の担い手育成を目指し、河北新報社などが運営する通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」の第4期第13回と14回講座が16日、仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスであった。

「震災の教訓」をテーマに、名取市にある津波復興祈念資料館「閉上の記憶」の語り部で閉上中学校遺族会代表の丹野祐子さん(52)と、元石巻西高校長の齋藤幸男さん(66)が講師を務めた。第4期としては初の対面式で実施。これまでは新型コロナウイルスの影響でオンライン開催が続いていた。

丹野さんは名取市閉上で

被災し、中学1年の長男を亡くした。津波に襲われる直前、中学校の校庭に避難していたという。「『津波だ』と大きな声が聞こえたので校舎の2階に駆け上がった。でも、すぐそばに居たはずの息子の姿はなかった」と振り返った。

丹野さんは遺族会をつくり震災の1年後、津波の恐ろしさ、命の大切さを伝えるため、犠牲になった生徒14人の名前を刻んだ慰霊碑を旧閉上中に設置。現在は閉上小中に移設されている。当たり前が当たり前でないこと、一番大切な命であることを子どもたちが教えてくれた」と述べた。

受講生に災害への心構えを問われると「10年前、私

は水、食料の備蓄はしていたが、地震の後に津波が来ると想像できなかった。今ここで地震が起きたらどうすればいいのか、とっさの判断ができるように想像力を養ってほしい」と答えた。

齋藤さんは実体験を基に避難所運営の課題を説明した。東松島市にある石巻西高は指定避難所ではなかったが被災直後から、多くの被災者が身を寄せた。避難所を円滑に運営する



震災発生日の出来事とその後の心の軌跡を説明する丹野さん

には「本部をトップに置いたトーナメント図のような組織だと、報告を上げて対応するまでに時間がかかってしまう。本部を中心にしたクモの巣状にすれば、担当者同士の横の連携が可能になり、柔軟な対応につながる」と強調した。

子どもにも役割を与えることを提案。「避難者と運営者が信頼関係を築く上で、生徒が重要な役割を果たした。子どもも自分が必要と

受講生の声

心ケア学びたい

丹野祐子さんが母親の視点で語った被災体験とわが子への思いを、実感を持って受け止めました。「閉上の記憶」は被災者の心のケアも行うと聞き、活動に興味を持ちました。教員志望なので子どもにも命の大切さを教え、心に寄り添えるようさらに学びたい。(宮城県美里町・宮城学院女子大3年、我妻あみさん・21歳)



子どもの役割鍵

避難所の運営は子どもがキーワードになると感じました。子どもを守るのはもちろん、子どもの自由な発想を生かすことも大事。将来は教員を目指しています。講師の話参考に、自分と同じような局面に立った時、どういう行動が取れるのか考えたい。(仙台市若林区・宮城教育大1年・佐々木晋哉さん・19歳)



メモ 311「伝える／備える」次世代塾を運営する推進協議会の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工大、宮城学院女子大、宮城学院大、仙台白百合女子大、宮城大、仙台大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構。